

芋を掘る
姿を見て、
一緒に働けると
思った

編集部=文
text by KOTONONE
河野 豊=写真
photograph by Yutaka Kohno

シリーズ「農と生きる障害者」
有限会社 岡山県農商

なんでもない畑に、
二〇〇人が集まった

昨年(二〇一五年)十一月、早朝、岡山県岡山市。空港から車で二〇分ほどの山の中。何のへんてつもない、広い畑。そこにだんだんと人が集まってくる。車でやってくる人もいる、歩いてくる人もいる。マイクロバスに乗ってやってくる大勢の人もいる。七〇人ほどの障害者が働く有限会社岡山県農商が主催する「芋掘り会」。岡山県農商で働く障害者はもちろん、周辺の福祉施設の障害者や職員、近隣住民などさまざまな立場の人が参加する大きな催しだ。午前一〇時に芋掘りがはじまるころには、二〇〇人ほどの人が集まっていた。ひととき大きな歓声を上げながら芋掘りを楽しんでいるのは、子どもたち。岡山県農商の障害者は、静かにその様子を見守り、掘り出した芋を運ぶ手伝いをしたりしている。芋掘り自体はわずか三〇分ほどで終了するが、その後には大きな鉄板でつくられる焼きそばと大鍋の豚汁、それにももちろん今掘ったばかりの芋をドラム缶を改造したコンロで焼いた焼き芋がふる

まわれる。みんなの笑顔を静かに見つめているのが、岡山県農商会長・板橋完樹さんだ。

農業をはじめると
組織的にやりたい

板橋さんが農業をはじめたのは、一九八九年のこと。それまでは県内で喫茶店を営んでいた。「今もそうですが、当時も農業のなり手は少なかつた。(花形)の商売ではなかつた。そこがよかつたんです」。出身は九州。奥さまの実家は岡山県で細々と農業をやっていたが、すべて一からの新規就農だった。「農業をはじめるとしたら、組織的にやりたい」と、板橋さんはそのころから考えていた。「家族的な農業ではなく、やるならば、人を雇って組織として農業をやりたい」と考えていました。そのため必要なのは、年間を通じて安定した収益を上げるのと、つまり一年中収穫ができる作物づくりだ。「この辺の名産であるネギは、通年での収穫が見込める野菜でしたので、当初からネギを主な作物にしようと考えていました」。今では珍しくなった「サイクルの軽トラック

岡山県で「農福連携」のモデルケースとして知られ、多くの視察者・見学者が訪れる「岡山県農商」。
障害者と一緒に働くことになったきっかけは、「芋掘り会」だった。
彼ら障害者との出会いが、岡山県農商の事業の強み、展開の広がりにつながっている。

